

# 孫文と梅屋の夢から100年

## アジア 覇権か協調か

「君は兵を挙げよ、我は財格で2兆円を超す。」

「君は兵を挙げよ、我は財格で2兆円を超す。」  
梅屋が孫文と描いた夢とは争の渦中、若き実業家である梅屋庄吉は孫文と邂逅し生涯を貫く盟約を交わした。孫文は日本亡命中、梅屋邸にかくまわれ、梅屋は生涯、孫文と中国革命を支援し続けた。梅屋が投じた財総額は、今日価値をもち支援す——日清戦

何であったのか。孫文の辛亥革命(1911〜12)が100周年を迎えるのを前に、去る9月、北京人民大学で、日中間外交の原初、梅屋と孫文の生涯を跡付ける国際会議が開かれた。21世紀の日中新時



孫文(中央)と梅屋夫  
妻=小坂文乃さん提供

代を志向し、孫文再評価や台湾との新たな関係構築をにらんだ動きの一環である。

孫文と梅屋は、頭山満ら玄洋社や黒電会系の大アジア主義者たちと共に、欧米支配からの東亜の解放と諸民族の連帯を夢見た。しかし孫文と梅屋は彼らと違い、東アジア新秩序の構築にあたり、日本盟主論に立たず軍事力と国家権益を軸ともしなかった。諸民族の対等な関係を軸に、下からの変革を包摂して、財と文化からなる新秩序を描いた。

その違いが、二つのアジア像の違いと重なった。東亜解放の原点を国権主義におくか民権主義におくかだ。同じように「脱歐入亜」に端を発しながら、前者は「進んだアジア」による「遅れたアジア」

一 藤栄進  
筑波大名譽教授  
(国際公共政策学)



しんどうえいいち 1939年生まれ。平和やアジアの問題について多く発言している。著書に『アメリカ 黄昏の帝国』『脱グローバリズムの世界像』など。

の解放に傾斜し、日韓併合や対支21カ条要求から大東亜共栄圏に至る「脱歐入亜」の反アジア主義と合流する。後者は、帝国主義に抗する五・四運動に共鳴し、戦後のバンドン会議(55年)に至るアジア共生論へ連結する。

日本のアジア主義の系譜でいえば前者は、徳富蘇峰、石原莞爾、戦時下の京都学派を経て、戦後期に及ぶ吉田茂らに至る。後者は、幸徳秋水に端を発し、梅屋から尾崎秀実らを経て、戦後期に及ぶ石橋湛山、大平正芳らに至る。

それは東アジアの発展を生み、市民社会を醸成する。また、生産や物流や環境保全の面での共通利益を強め、地域協力を要請する。加えて豊かな都市中間層を軸に、韓流ブームなどに象徴される共通文化の興隆と再生を生む。新アジア主義の台頭だ。

そこで要請される地域統合は、かつて日本の大アジア主義者が志向した日本盟主論に依拠してはいない。中国のアジア主義者が志向した中日主導でもない。韓国のアジア主義者が志向した日清朝連盟でもない。むしろ弱小なASEAN(東南アジア諸国連合)諸国が中心に座り、日中韓3大国を束ねて統合の推進役を担う。辛亥革命後100年の歴史が、財と文化のソフトパ

ワーを軸に、対等な地域協力の制度化を進める構図だ。  
孫文と梅屋が生きた100年前と同じように今、二つのアジアへの道が私たちに提示され、いずれのアジアを取るのか、日本(と中国)に選択を求めている。

その選択は、孫文が死の4カ月前、神戸での「大アジア主義」と題する講演の最後に投げ掛けた言葉に集約される。「あなた方は、西方霸道の手先となるのか、東方王道の干城(守り手)となるのか」。同盟の強化を通じて「危険な」大陸アジアとの対抗を図る覇権主義的同盟外交の道か、協調主義的多元外交の道かという問いだ。  
後者を指すならば、鳩山由紀夫、温家宝両首脳が基礎を築いた日中間での東シナ海ガス田開発を含む食品環境エネルギー共同体の推進を目指すことこそが、手がかりになる。それを、100年の時空を超えた、孫文と梅屋の夢だと言ひ換えてもよい。